

『千曲川はんらん』を読んで

ニュースでは簡単に「氾濫」と言うけれど、
そこに暮らす人々の様子は伝わらないなぁと改めて感じました。

こずえ(小4)



『千曲川はんらん』を読んで

桜づつみを信用していたのに、決壊して
りんごを収穫できなくなってしまったら、
りんご農家だった場合、収入がなくなってしまうので
大変だと思ったけれど、長沼地区の人は、他の県の人
の力もかりて、復活したのすごいいと思いました。
他県なのに、ボランティアをした人は
やさしいなと感心しました。

ももか(小4)

『千曲川はんらん』 を読んで

この本を読んで、水災ってやっぱりこわいと思った。

自分の住んでいる所や、町が水びたしになると、

あとしまつも大変そうだと分かった。

みんなが悲しそうな顔をしていたから、つらかった。

ボランティアの人は、とてもやさしいし、

みんなもあとしまつをがんばっていて、良かった。

ふみか っ(小4)

『千曲川はんらん』を読んで

制服やテレビが泥につかってしまった。

悲しみから、どうやって前を向くのだろう。

それは、「仲間」の存在だと思う。

絆を深めた「仲間」だからこそ、本当の自分が出せる。

みんなが一つになって、何かをやりとげたとき、

「絆」は生まれると思った。

ひまり(小6)



『池の水なぜぬくの?』を読んで

魚の命が短いことがわかって、魚を大事にあつかわないと
いけないと思った。最初は、わたしは池の水をぬいているところを
見たことがなかったため、魚のことをあまり考えたことはなかったけれど、
この本を読んで、魚の大切さに気づけて、魚のことを考えるようになった。

もっと魚のことを知りたいと思った。

また、魚のほかの生き物のことについても知りたいと思った。

はるか(小5)

『池の水なぜぬくの?』を読んで

この本では、生き物の種類や、似た生き物の見分け方、
生き物のあつかい方、作業するときに必要なことがとりあげられています。

生き物は、どんな存在であっても、他の生き物と関係しています。

そのため、全ての生き物が大切な存在なのです。

池の水は、ぬくことで、いろいろな問題が起こりますが、

それでも、生態系を保つために必要なのです。

こうへい に(小5)

『池の水なぜぬくの?』 を読んで

ぼくの家そばに、お堀があります。

ミシシippアカミミガメ、ブルーギル、スッポン、シラサギ、トビ、マガモや

たくさんの昆虫、植物が集まっています。鯉にえさをやる時もあります。

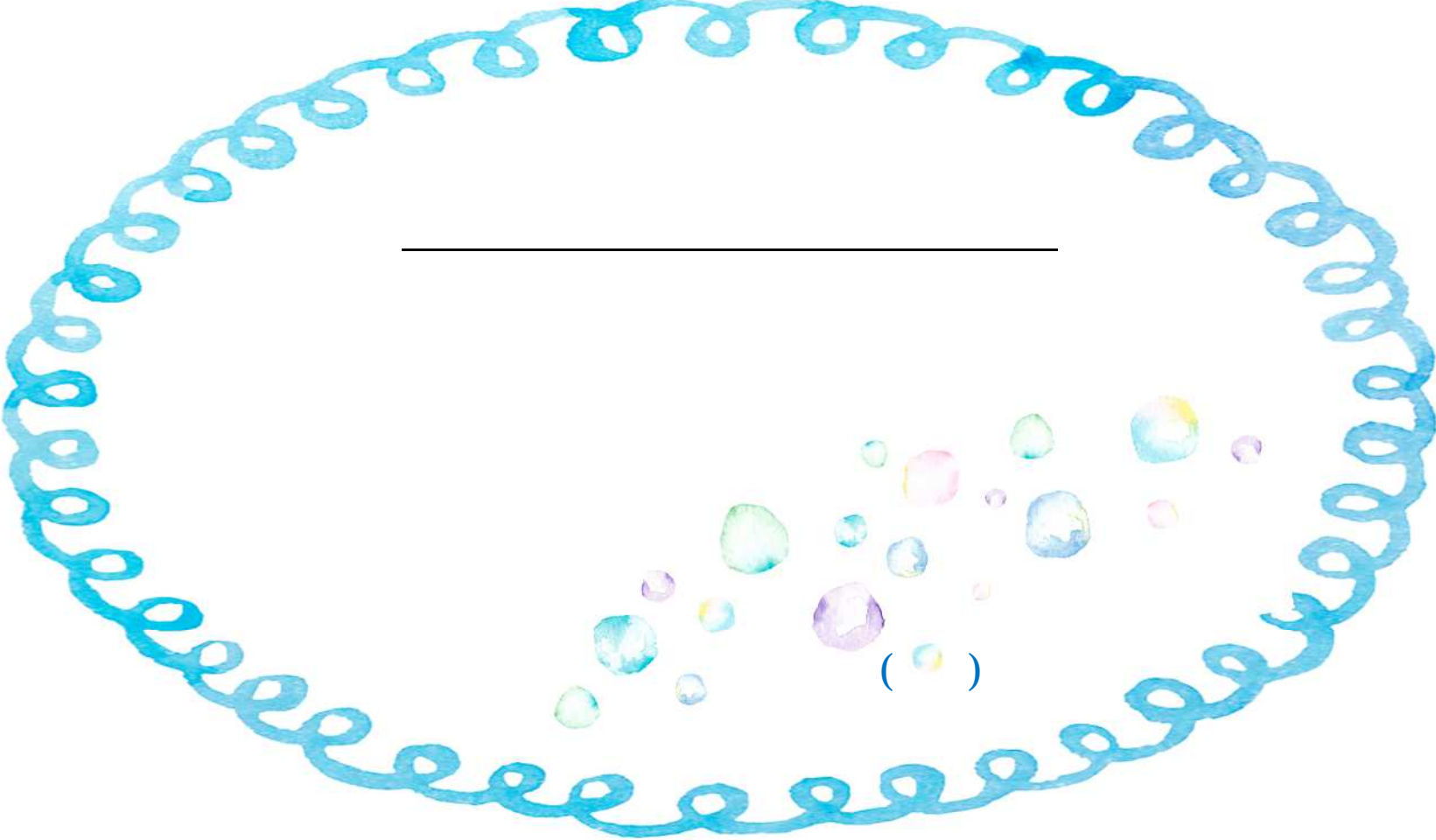
歩いて出かけるときは、いつもお堀の生き物を眺めて立ち止まってしまいます。

この本を読んで、お堀は大丈夫かなと気になりました。

ぼくが部屋をそうじすると気持ちよくらせるのと一緒に、お堀もきれいにして

生き物が気持ちよくらせるようにしてあげたいなと思いました。

りお(小4)



『池の水なぜぬくの?』 を読んで

テレビでよく池の水を抜く番組があるけれど、池の水だけを抜くのではなく、生き物を捕まえたり、池のそこにたまった泥をきれいにしたり取ったりします。

池の水を抜く本当の理由がわかります。

こうへい ま(小4)

『池の水なぜぬくの?』を読んで

この本は、ぼくが知らない日本古来の生物のことが
たくさんのもっているの、もっと読みたくなります。
さらに、写真がのもっているのも、うれしいです。

かずき(小5)



『池の水なぜぬくの?』を読んで

わざわざ災害をおこすために池の水を抜いているなんて
想像もできませんでした。

そして洪水が池にとって良いことだったなんて知りませんでした。

だいと(小5)



『命の境界線』 を読んで

私が最初に知っていたことは、奈良県でしかは大事にされているということでした。

けれど、奈良県でも場所によって、しかがくじょされているところもあると知って、びっくりしました。

最初は、しかがくじょされることをかわいそうだと思いました。けれど、くじょしないと町に出てきたり、自然にも影響するからしかたがないなと思いました。

題名どおり命にも境界線があるんだなと思いました。

はるか(小5)

『命の境界線』 を読んで

奈良公園ではかわいがられる鹿。

でも、野生では「獣害」として殺されてしまう鹿。

本当の人間との「境界線」、かわいがる「境界線」はどこにあるのかな。

こうへい ま(小4)



『命の境界線』を読んで



人間が勝手に決めただけの「県」が違うというだけで、
その境がない野生動物が保護されたり、
処分されたりするのはなぜだろうと思った。

野生動物が増えすぎてしまったのは元をたどれば人間のせいなので、
その駆除されてしまった野生動物たちを有効活用したりして
自分ができることを少しでもしていきたいと思いました。

ななえ(小6)



『命の境界線』を読んで

奈良のシカは大切にされているのに、他のところだと
ころされるので、びっくりしました。

シカはとてもきちょうなのに、ころして食べるとは知りませんでした。

奈良と他のところとは、同じ仲間のシカでも、
見る目のちがうところが少しかわいそうだなと思いました。

ふみか っ(小4)

『聞かせて、おじいちゃん』を読んで

原ばくとはどんな物だろうと思っていたけれど、
この本を読んで、とてもおそろしい物だとわかったので、
森政さんは、話をするのにとても勇気が必要だと思いました。
森政さんは、おじちゃんなのにかっこいいなと思いました。

ゆみ(小5)

『聞かせて、おじいちゃん』 を読んで

広島に原爆が落ちて、こわかったと思うけれど
人前でそのことを話してすごいと思いました。

ももか(小4)

『聞かせて、おじいちゃん』を読んで

おじいちゃんは、わたしと同じ年くらいで戦争を体験していて、しかもひどいけがを負った人の手当てもして、とてもすごいなと思いました。

わたしはきずやけがややけどなどを見るのもいやです。

けどおじいちゃんは、ちゃんと話して、すごいと思いました。

わたしはこの本を読んで知ったことを、ほかの人に言ったりこの本をしょうかいしたりして、もう戦争がないようにしたいです。

はるか(小5)

『登り続ける、ということ。』を読んで

この本を読んで、私はとても感動しました。

野口さんが富士山の清掃をしたり、サマ村の子ども達を救う活動を見て、

あきらめずにチャレンジすることは大事だと思いました。

野口さんがサマ村の人たちのために寄付を集めて学校を建てたり、

地震の時にテントを支援したりしていて

本当にすごい人だなと思いました。

夢や考えたことを実現していく野口さんみたいに

私もがんばりたいです。

さき ゆ(小6)

『登り続けるということ』を読んで

僕は野口さんみたいに
いつか命を迷わずかけられる仕事をしたいと思いました。
この人は今も走り続けています。
こども司書クラブのノンフィクションはみんなあきらめない、
自分を信じ通す、そして走り続ける、ということが言えると思いました。
みんなすごいです。



だいと(小5)

『世界でいちばん優しいロボット』を読んで

私がつくに印象にのこった話は、幸せを運ぶチョコレートです。

「ワン・フォー・オール。オール・フォー・ワン。」の文です。

この言葉は知っていたけれど、意味は知りませんでした。

でも、この本で意味を知って、自分にもできることがあったら、

私も人のためにがんばろうと思いました。

ゆみ(小5)

『世界でいちばん優しいロボット』を読んで

この本には、幸せを運ぶチョコレートの石原紳伍さんと、
魚を逃がす漁師さんの齋藤芳之さんと、世界でいちばん優しいロボットの
吉藤健太郎さんの3人がでできます。

3人ともあきらめずに行動してすごいなと思いました。
あとがきに書いてあるように「ずーっと続けることはすごく難しいけれど、
とても大切な事」なんだなと思いました。

しおり(小5)

『世界でいちばん優しいロボット』を読んで

この3つのお話の中で一番心に残ったのは、
一番最後の「世界でいちばん優しいロボット」です。

小さいころ実際に自分自身が引きこもりだった経験のある吉藤健太郎さんが、

「孤独」を解消するために、使う人のことを

本当に考えているんだなと思いました。

何度も何度も改良を重ね、それでもまだまだ頑張ろうとする

吉藤さんがすごいと思いました。

ななえ(小6)

『世界でいちばん優しいロボット』を読んで

「何かちがう。一回成功しても満足してはいけない。

終わりなんてない。仲間とともに常に前に走ろうとしている」

これが良いと思いました。

ちょっとしたことでめぐってきたチャンスを逃さない。

こういうことができたから三人とも成功できたのだと思いました。

だいと(小5)

『世界でいちばん優しいロボット』を読んで

仲間とは、一つのことをいっしょに力を合わせて
やりとげることができる人だと思う。

それだけでなく、相手がどう思うかを第一に考える人こそが
仲間なのではないかと思った。

私はおなじ年の中でいちばん相手のことを考える人になりたい。

そして、たくさんの人を助けたいと思った。

ひまり(小6)

『チバニアン誕生』 を読んで

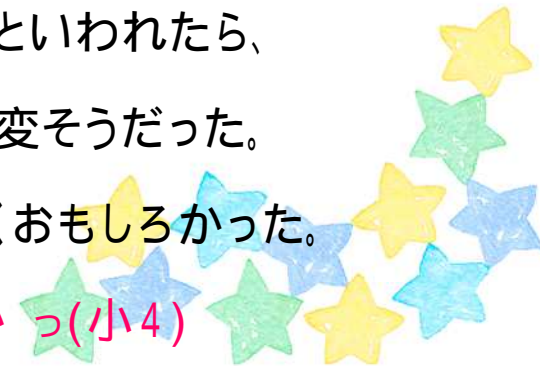
「チバニアン」を作るまで、とても時間がかかったと分かった。

自分が地名でれき史名などを作れといわれたら、

ぜったいに作れない。それぐらい大変そうだった。

自分の知らない「チバニアン」がすごくおもしろかった。

ふみか っ(小4)



『捨てないパン屋の挑戦 しあわせのレシピ』を読んで

あんなでっかくてかたそうなパンだけでやっていけるのが不思議です。

でもずっと苦労してやって、成功できたのはすごいと思いました。

フランスの技術はなかなかまねできないんだとわかりました。

だいと(小5)

『カワネズミを見てみたい!』を読んで

私もこの本の作者が影響を受けた
小林朋道先生の本を全部読みました。
大学の研究室がとてもおもしろかったです。

まよ(小6)



『カワネズミを見てみたい!』 を読んで

この本を読んで、実さいにこの本にのっていたテスト問題が出たら、

自分とはけないと思う。カワネズミを見たことはないけれど、

きょう味を持ってよかった。

また、近くの川にもカワネズミがいるのか知りたくなり、

本を読んでみておもしろかった。

ふみか っ(小4)

『ノーサイド』 を読んで

僕はこの本に出てくる両チームはすごいことをしたんだと思います。

なぜなら「このご時世の中、見ている人達を少しでも
元気づけられるように」という多くのオリンピック選手が目標にすることを、
この人たちはそのつもりがなかったのにやってのけたからです。
こんな試合がやっていたのなら見てみたかったです。

だいと(小5)

『よみがえれ、マンモス!』 を読んで

もうずっと昔に絶滅した生き物をよみがえらせる可能性があることに驚きました。もし復活させることができるとしたら、

私はニホンオオカミを復活させたいです。

ただ、一度絶滅したものを復活させると、今の生態系を

また乱してしまうのではないかと思います。

絶滅しそうな生き物の保護の方が大事かなと思います。

まよ(小6)

『よみがえれ、マンモス!』を読んで

マンモスは、2万8000年前に絶滅してしまいました。

でも、今の技術を駆使すれば復活させることが

できるのではないだろうか?という発想がすごいと思いました。

辛抱強く待ったり、失敗してもあきらめずもう一度試してみたりする姿勢が

私はあまり得意ではないので学びたいと思いました。

ななえ(小6)